

二重主語名詞述語文の語順

須永 哲矢

0. はじめに

「XハYガZ」といういわゆる二重主語文〔注1〕は、典型的には形容詞述語のものが考えやすい。

(1) 象は鼻が長い。

このような文においては、XとYは「の」で結ばれるような全体一部分の関係にある。〔注2〕さて、このようにXとYが全体一部分関係に支えられている二重主語文には、名詞述語のものもある。

(2) あの俳優は父親が総理大臣だ。

本稿では、名詞述語の二重主語文「XハYガZダ」について、特にYとZの語順を中心に考察する。

1. 名詞述語の二重主語文の語順

名詞述語の二重主語文は、「名詞1 ハ 名詞2 ガ 名詞3 ダ」という形をとっている。このように述語部分までが名詞であるため、「名詞1 ハ 名詞2 ガ 名詞3 ダ」、つまり「XハZガYダ」という、形容詞述語などでは不可能な語順をとることができる。

(2) あの俳優は父親が総理大臣だ。(XハYガZダ)

(3) あの俳優は総理大臣が父親だ。(XハYガZダ)

同様のタイプに、以下のようなものが挙げられる。

- (4) この作品は太郎が作者だ。
- (5) ヤギは干し草が主食だ。
- (6) 彼はヤギの観察が趣味だ。
- (7) サイは側頭部が弱点だ。
- (8) あの火災は太郎の不注意が原因だ。
- (9) 太郎は貧乏ゆすりがかせだ。

以上の(4)～(9)は、以下(10)～(15)の「XハYガZダ」に対する「XハZガYダ」と位置付けられるだろう。

- (10) この作品は作者が太郎だ。
- (11) ヤギは主食が干し草だ。
- (12) 彼は趣味がヤギの観察だ。
- (13) サイは弱点が側頭部だ。
- (14) あの火災は原因が太郎の不注意だ。
- (15) 太郎はくせが貧乏ゆすりだ。

このように、名詞を述語とする二重主語文では、「XハYガZダ」という語順のほかに「XハZガYダ」という語順をとらうる。しかも上の例を見ると、名詞述語の場合、語順を入れ換えた「XハZガYダ」の方が自然な場合が多いようにさえ思える。しかし、名詞を述語とする全ての二重主語文が語順の入れ換えを許すわけではない。

- (16) ヤギは体高が約70cmだ。(XハYガZダ)
- (17) ?ヤギは約70cmが体高だ。(XハZガYダ)

(16)(17)のように、語順の入れ換えがしにくいものも、一方ではある。また、語順の入れ換えがしやすいものの中でも、例えば(9)(15)の「くせ」—「貧乏ゆすり」では、語順を入れ換えた「XハZガYダ」の方がより安定的に感じられるのに対して、(2)(3)の「父親」—「総理大臣」では語順を入れ換えた「XハZガYダ」も、そのままの語順の「XハYガZダ」もそれぞれに安定的である、というように、YとZの語順に関してそれぞれに傾向差がある。以下では、YとZの語順の入れ換えに関して、入れ換えが可能か、また可能な場合にはどちらがより自然かの傾向差があるかなどに関わる要因について、現時点で可能な限りの整理を試みる。[注3]

2. YとZの語順に関わる要因

以下では、もとの語順「XハYガZダ」においてガ格であるYの側の要因と、もとの語順で述語であるZの側の要因と、2つの方向で考える。

2. 1. Yにおける要因

(a) Yがあってもなくてもさほど文意が変わらないもの

名詞述語の「XハYガZダ」の中には、以下のように、Yがなくてもさほど文意が変わらないような場合がある。(18)は「XハZダ」とした(19)でも、さほど文意は変わらない。

(18) 彼は階級が少尉だ。

(19) 彼は少尉だ。

このような場合の「XハYガZダ」に関しては、語順の入れ換えは、やってできないことはないが、語順を入れ換えた「XハZガYダ」は何か不自然、あるいは何か特別な文脈、という感じを与えるようである。

(20) ?彼は少尉が階級だ。

(b) Yがないと文意が変わってしまうもの

(a) 以外、つまり「XハYガZダ」を「XハZダ」としてしまおうと文意が変わってしまう普通の「XハYガZダ」に関しては、おおむね語順の入れ換えは可能であるが、その中でもYが個体として意識しやすいか、あるいはむしろXの側面として意識されるかによって、どちらの語順がより自然であるかの傾向差がさらに分かれるようである。

(b-1) 「(Xの) Y」が個体として意識しやすいもの

「(Xの) Y」が物理的な部分、関係者、構成員、備品など個体として意識しやすいものは、語順の入れ換えが可能で、「XハYガZダ」「XハZガYダ」それぞれがありうるようである。

- (2) あの俳優は父親が総理大臣だ。(YガZダ)
(3) あの俳優は総理大臣が父親だ。(ZガYダ)

(2) (3) はそれぞれに自然であろう。

さて、YとZの語順がとりあげられる問題として、以下のようなものがたびたび指摘されている。

- (21) この病院は院長が太郎だ。(YガZダ)
(22) この病院は太郎が院長だ。(ZガYダ)
(23) この病院は看護婦が花子だ。(YガZダ)
(24) ?この病院は花子が看護婦だ。(ZガYダ)
- (25) この芝居は主役が太郎だ。(YガZダ)
(26) この芝居は太郎が主役だ。(ZガYダ)
(27) この芝居は端役が太郎だ。(YガZダ)
(28) ?この芝居は太郎が端役だ。(ZガYダ)

(21) ~ (24) については、「院長」は入れ換え可能なのに対して「看護婦」にすると不自然になる、(25) ~ (28) については「主役」は入れ換え可能であるのに「端役」は入れ換えが不自然、などということが指摘されている。[注4] ただ、「看護婦」や「端役」とて入れ換えが完全に不可能なわけではない。確かに「院長」「主役」と比べると、特別な文脈なしにいきなり聞いたら不自然な感じがするが、「花子」が知人である場合や、「あの太郎が端役だなんて」という驚きを含む場合などは入れ換えは可能であろう。[注5]

次の(b-2)との比較のためには、Yが個体として意識しやすい場合には、原則入れ換え可能であるものの、(21) ~ (28) で見たように、入れ換えると自然には受け入れにくい場合まであることに注目しておきたい。(b-1)は、入れ換えても入れ換えなくても自然か、入れ換えない方が自然、と大掴みすることができる。

(b-2) YがXの側面であるようなもの

性質や趣味、くせなど、個体として意識されるというよりはXの側面といえるようなものがYである場合、やはり入れ換え自体は可能なのだが、さらに進んで「XハYガZダ」よりも語順を入れ換えた「XハZガYダ」の方がより自然になるようである。

(29) ?彼は趣味がヤギの観察だ。(YガZ)

(30) 彼はヤギの観察が趣味だ。(ZガY)

(31) ?彼はくせが貧乏ゆすりだ。(YガZ)

(32) 彼は貧乏ゆすりがくせだ。(ZガY)

(33) ?あの火災は原因が太郎の不注意だ。(YガZ)

(34) あの火災は太郎の不注意が原因だ。(ZガY)

以上から、Yの側での語順の自然さの傾向をおおまかにまとめると、以下のようになる。
(自然さを等号、不等号で示す)

a、あってもなくてもいいようなY
 $XハYガZダ > XハZガYダ$

b-1、個体
 $XハYガZダ > XハZガYダ$ (看護婦、端役など)
 $XハYガZダ = XハZガYダ$ (主役、院長など)

b-2、側面
 $XハYガZダ < XハZガYダ$

2. 2. Zにおける要因

2. 1ではYの側から順の入れ換え傾向をみたが、ここでは述語「Zダ」の側から傾向をみることにする。「名詞述語」をとりあえず「名詞+指定辞」と規定するにしても、その中にはさまざまなものがある。そしてその違いによってYとZの入れ換え可能性や自然さが変わってくるようである。

(ア) 形状、色、性質など

「○○だ」といえるとしても、その中には形状や色や性質などを語り、全体として属性形容詞相当のものもある。

まん丸だ、きれいだ、感動的だ、真っ赤だ・・・

これらはもはや述語「Zダ」が属性形容詞相当であり、このようなものに関しては、属性形容詞の二重主語文では当然YとZの語順の入れ換えがありえないのと同様に、語順の入れ換えは許されないようである。

(35) ヤギは黒目が横長だ。(YガZダ)

(36) *ヤギは横長が黒目だ。(ZガYダ)

(37) この犬は毛並みがきれいだ。(YガZダ)

(38) *この犬はきれいが毛並みだ。(ZガYダ)

(39) ウサギは目が真っ赤だ。(YガZダ)

(40) *ウサギは真っ赤が目だ。(ZガYダ)

これらのZガYダ、という入れ換えは、「不自然」どころでなく「不可能」と言うべきだろう。

(イ) 数量

「Zダ」で数量を表すものに関しても、語順の入れ換えはできないようである。

(41) タコは足が8本だ。(YガZダ)

(42) *タコは8本が足だ。(ZガYダ)

このように数量を語る場合というのは、存在量を語っているという点で存在表現の一種といえることができる。だとすれば、(ア)の「Zダ」が形容詞述語相当であったのに対して、ここでの「Zダ」は「ある」に代表されるような存在詞述語に類するものであって、それがためにもはや語順の入れ換えは許されないと考えることができそうである。

[注6]

(ウ)「Z」が「ZのY」という関係にあるもの

(43) 彼はパソコンが最新型だ。(YガZダ)

(44) *彼は最新型がパソコンだ。(ZガYダ)

(45) この料理は牛肉がアメリカ産だ。(YガZダ)

(46) *この料理はアメリカ産が牛肉だ。(ZガYダ)

上例のように、これらはYとZの入れ替えができない。これらのYの特徴は、「最新型」は「最新型のパソコン」、「アメリカ産」は「アメリカ産の牛肉」というように、というように、Zに「ZのY」という意味が読み込まれる点にある。このような場合は、YとZの語順入れ換えは許されない。同様のものに以下のようなものがある。

新型、メキシコ製、洋式、ミラノ風、など。

(エ) 通常の名詞

(ア) ~ (ウ) 以外の名詞の場合、基本的に入れ換え自体は可能であり、YガZダ、ZガYダのどちらが自然であるかについては2. 1でみた要因次第のようである。

(2) あの俳優は父親が総理大臣だ。(YガZダ)

(3) あの俳優は総理大臣が父親だ。(ZガYダ)

(2) (3) は入れ換え可能、Yが個体として意識されることもあって (b-1)、ともに自然である。

(29) ?彼は趣味がヤギの観察だ。(YガZ)

(30) 彼はヤギの観察が趣味だ。(ZガY)

(29) (30) は入れ換え可能な上に、YがXの側面であることから (b-2)、入れ換えた方が自然である。

以上2. 1、2. 2から、名詞述語の二重主語文の語順に関しては、以下のように整理できる。下図のとおり、2. 2の(ア) ~ (エ) ではそもそも入れ換えが可能か否かの要因を整理し、2. 1の(a) (b) では入れ換え可能な場合に、どちらの語順が自然かを整理したことになりそうである。

[語順入れ換え不可能]

- ・「Zダ」が属性形容詞相当 (ア)
ウサギは目が真っ赤だ / *ウサギは真っ赤が目だ。
- ・「Zダ」が数量表現 (イ)
タコは足が8本だ / *タコは8本が足だ。
- ・「Zダ」が「ZノYダ」(ウ)
彼はパソコンが最新型だ / *彼は最新型がパソコンだ

上記以外：入れ換え可能 (エ)

[そのうち、YガZダ、ZガYダのどちらが自然か]

- ・なくてもいいようなY (a)・・・XハYガZダ > XハZガYダ
彼は階級が少尉だ / ?彼は少尉が階級だ

- ・Yが個体 (b-1)・・・XハYガZダ > XハZガYダ
この病院は看護婦が花子だ / ?この病院は花子が看護婦だ
XハYガZダ = XハZガYダ
あの俳優は父親が総理大臣だ / あの俳優は総理大臣が父親だ

- ・Yが側面 (b-2)・・・XハYガZダ < XハZガYダ
?彼はくせが貧乏ゆすりだ / 彼は貧乏ゆすりがくせだ

3. 「好きだ」「嫌いだ」などの二重主語文について

「〇〇だ」という述語を名詞述語というなら、「好きだ」「嫌いだ」なども含まれる。これらも二重主語文をとりうる。むしろ、普通の名詞述語どころでなく、二重主語文をとりやすい。

(47) 私は魚が好きだ。

(48) 私はあの人が嫌いだ。

一般に「好きだ」「嫌いだ」は情意形容詞に近いものとして感覚されるようである。それは、「XハYガZ」という二重主語文をとり、その際Yには一見目的語に近いようなものをとる、という共通性によるのだろう。

(49) 私はあの人が憎い。

(50) 私はロッテの優勝がうれしい。

(49) (50) は情意形容詞による二重主語文であるが、本稿でみてきたような、XとYに全体一部分関係があるというものではなく、「私」と「あの人」「ロッテの優勝」との間には全体一部分関係などは認められない。このような違いから、尾上(2004)などでは全体一部分関係による二重主語文を第2種二重主語文とするのに対し、情意形容詞によるこのような二重主語文は別種だとし、第1種二重主語文として区別している。

[注7]

さて、(47) (48) は確かに(49) (50) に似たもののように見える。(49) (50) の情意文は本稿でみてきた全体一部分関係による二重主語文とは全く別個の二重主語文だとするなら、(47) (48) についても別扱いすべきだろうか。

しかし一方で、(47) (48) については、(49) (50) のような情意形容詞の二重主語文とは異なる性格も三点指摘できる。

まず第一に、情意形容詞による二重主語文は、基本的にその場・その時の個別的な情意事態を語るものである。それに対し、「好きだ」「嫌いだ」の(47) (48) は、個別的な情意事態というより、「私」というものの性質を語っている文に見える。

第二に、情意形容詞の二重主語文のXには、基本的に1人称しかとりにくいことがよく知られているのに対して、「好きだ」「嫌いだ」は(51)のように3人称でも自由にとりうる。

(51) 太郎は魚が好きだ。

さらに第三に、情意形容詞の二重主語文の場合、(52) (53) のように「Xハ」を「Xニハ」としてもかまわないのに対して、「好きだ」「嫌いだ」の「Xハ」は「Xニハ」にするとなじまない。

(52) 私にはあの人が憎い。

(53) 私にはロッテの優勝がうれしい。

(54) *私には魚が好きだ。

(55) *私にはあの人が嫌いだ。

以上からして、「好きだ」「嫌いだ」を情意形容詞の側にそろえて考えなくてもいいので

はないか、という可能性も見えてくる。そこで考えられるのは「好き」「嫌い」をXの側面とみて、(47) (48) の二重主語文を「XハZガYダ」と解釈する、という方向性である。これについては、似た意味を持つ名詞述語文が手がかりになるだろう。

(56) 太郎は魚が好物だ。

(57) 太郎は魚が好きだ。

上の (56) (57) は (51) 「好きだ」ときわめて近いと言えよう。そして、これら (56) (57) は、下の (58) (59) の「XハYガZダ」に対する入れ換え「XハZガYダ」であると考えることができる。

(58) 太郎は好物が魚だ。

(59) 太郎は好みは魚だ。

だとすれば、「好きだ」「嫌いだ」も同様に考えて、(51)は、実際の言語表現としては用いられないが(60)の「XハYガZダ」に対する入れ換え「XハZガYダ」であると考えられるのではないだろうか。

(60) (太郎は好きが魚だ。)(XハYガZダ)

(51) 太郎は魚が好きだ。(XハZガYダ)

2. 節でみたとおり、「XハYガZダ」には、「Zダ」が形容詞相当、つまりは学校文法でいうところの形容動詞のように、語順の入れ替えが許されないものがある一方で、YがX側面の場合に至っては入れ替わった語順の方が自然になる。「好き」「嫌い」ももともとはYの位置にあるものとするならば、Xの側面と言うことができよう。だとするならば、側面の場合には入れ替わった方が自然、ということの先に、入れ替わった語順しか許されないという形で、つまりはさきの「形容動詞」とはちょうど反対側で語順が固定したものとして「好きだ」「嫌いだ」という「形容動詞」が位置づけられることになるだろう。

なお、このように考えるならば、同様の述語として「得意だ」「苦手だ」「上手だ」「下手だ」などが挙げられるだろう。

(61) 太郎は野球が 得意／苦手／上手／下手 だ。

(62) (太郎は 得意／苦手／上手／下手 が野球だ。)

4. おわりに

以上、本稿では名詞述語の二重主語文「XハYガZダ」について、語順の入れ換え「XハZガYダ」が許されるか、また許される場合にどちらが自然かに関する要因を整理し、その先に「好きだ」「嫌いだ」の位置づけを試みた。どちらの語順が自然かの傾向については、より細かい要因が考えられるだろうし、「父親が医者だ」「医者が父親だ」のように「どちらも自然」とだけ言ったものについても、それぞれの表現性がどのように違うか、また、それと関連して文脈によってはどちらがふさわしいか、といったことも考えなければならないだろう。また、「好きだ」「嫌いだ」などを含めても、「XハZガYダ」というように語順を入れ換えた方がなじんでしまう場合がなぜ存在し、その場合になぜ情形容詞の二重主語文のY項と、「好きだ」「嫌いだ」の「Zガ」との間に近いものを感じてしまうのかなど、まだまだ考えなければならないことは多いが、全て今後の課題としたい。

[注]

- (1) 尾上(2004)、尾上・木村・西村(1998)などによる。
- (2) 尾上(2004)などでの「第2種二重主語文」。また、ここでの「全体」に対する「部分」とは、物理的なものに限らず、関係者や側面などまでを広く含む。
- (3) 以下の整理はあくまで現時点でのものであり、これで全ての傾向が説明できるものではないことをあらかじめお断りしておく。
- (4) この違いについて、例えば西山(1990)ではパラ미터の値を設定しない限りその指示対象が決まらないという非飽和名詞句(院長)とそれだけで外延決定が充足している飽和名詞句(看護婦)の違い、尾上(2004)では語順入れ換えが起こりうるのはY=Zの一致関係が語られている場合のみである、と説明している。
- (5) おそらくは二重主語文以前の「AハB」に対する「BガA」の表現性の問題であろうが、ここでは措く。
- (6) 「Zダ」が数量をあらわすといえるものの中には、以下のようにYとYが入れ換え可能な反例も見つかる。単にXの部分であるYの数量を語るのではなく、下例のように「Xの全体においてYが占める量」を語る場合には入れ換えが許される。

予選A組は、勝ち残りが2組だ。(YガZダ)

予選A組は、2組が勝ち残りだ。(ZガYダ)

- (7) 尾上(2004)などによれば、第1種二重主語文とは、「事態認識の中核項目」と「事態認識における着目点」という通常一致しているはずの主語の二側面が一致しない場合に、その二つ

の方向でそれぞれ主語を持った結果としての二重主語文であるとし、情意文の他に存在文、出来文において同様の現象がおりうるとしている。

参考文献

- 尾上圭介（1997—1998）「文法を考える・主語（1）～（4）」『日本語学』16—10, 11, 17—1, 4
- 尾上圭介（2004）「主語と述語をめぐる文法」尾上圭介編『朝倉日本語講座6文法Ⅱ』朝倉書店
- 尾上圭介＋西村義樹＋木村英樹（1998）「二重主語とその周辺—日中英対照」『言語』27—11
- 西山佑司（1990）「「カキは広島が本場だ」構文について—飽和名詞句と非飽和名詞句—」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』22
- 野田尚史（1982）「「カキ料理は広島が本場だ」構文について」『街兼山論叢 日本学篇』13

（すなが・てつや 大学院人文社会系研究科 博士課程2年）